



お盆

おぼん

関東では七月、関西では八月。一三日から一五日にかけて、日本全国「お盆」がやって来ます。

納涼盆踊り・豊年盆踊り大会・帰省ラッシュ等など、もはや現代では宗教行事というより国民的な一大イベントとなっています。

日本でこの「お盆」が最初に行われたのは齊明天皇二年(657)。仏教伝来直後です。インドから渡ってきた仏教に、日本古来の死者まつりが付加されました。以来日本では「精靈送り」(お盆の灯籠流し)や「死者供養」のいろいろが濃くなっています。

その上、『盂蘭盆經』(お釈迦さまの時代から遙か後世につくられた偽經)の伝説も付け加えられて、ますます『先祖供養』の色彩が濃くなってしまった。

『盂蘭盆經』に語られている説話は、お釈迦さまの弟子で智慧第一と称された目蓮か、修行の結果「天眼通」(見た世界まで見通せる神通力)を開き、はじめて亡くなった母の死後の行方を尋ねてみると、母は、子ゆえにつくった罪の報いで「餓鬼道」に墮ち、逆さに吊るされて責められている。

盂蘭盆の語源はウツランバナ逆さ吊りという言葉。

目蓮はお釈迦さまに、その母の救済をお願いした。

お釈迦様は、いま修行学問に励んでいる仏弟子に供養しなさいと教えた。その教えに従つ

た目蓮の供養が功を奏し、母は餓鬼から救われた。歓んだ目蓮が歓喜のため踊ったのが盆踊りの始まりといふところまで伝えられています。

亡き人の徳を讃え、祖先を祀るのは決して悪いことではない。

しかし宗教、なかんずく仏教の目標すところは、「このわが身の救い」である。ここを踏み外しては仏教ではない。そうした意味から原始にかえり、お釈迦さま時代のウツランバナを考えてみたい。

さて、

お釈迦さまの周りには、沢山のお弟子が集まり、集団で学問修行に励んでいた(この集団をサンギャ僧伽と叫ぶ)。この弟子集団は毎年春から夏にかけての三ヶ月間、森の中や寺院内に籠もって、修行学問に励んだ。これを「夏安居」(げあんご)とよんだ。

インドでは雨季に出歩くと、不用意に草木や生き物を殺してしまうことになる。どんな小さなのちも大切にという配慮が働くいたと

言われる。

その三ヶ月間の最終日、七月・八月の一五日。その日をお釈迦さまは『自恣の日』(じしの日)と戒律で定めた。

自恣というのは自分を反省懺悔すること。

修業学問をすることは大事なことだが、その功を積めば積むほど、高慢の角が生えてこない。

先生づら、指導者ぶり、高徳者がおなど、いか。

今も昔も恐ろし落とし穴。

学問する人・修業に励む人、つねに「内省」せよとのお釈迦さまの戒めを、わたしはお盆に当たり尊くいただくのである。

講



わたしの生まれ育った里の家は、「真言宗」でした。縁あってこの地この家に嫁いできてからはや五〇年になります。「三つ子の魂百まで」と言いますが、今だに真言陀羅尼、ギヤーテー・ギヤーテーをつい口づさみますし、なんのことなしにお大師さまをお慕いしてもらいます。

しかし嫁にきてから五〇年、こちらの浄土真宗の家と村に暮らしているうち、今になつて浄土真宗の有り難さというかスバラシさが少しづつ分かりかけてきたように思います。

八月 葉月 の ごよみ

一日 銀杏会(東京)

岸下晴子さま一周忌・初盆法事

五日 朗読ボランティア(録音)

七日 横山ウメノさま一周忌

八日 平野孝幸氏家二五回忌法事

十一日 出石町A盆参り

十二日 永井 五生さま初盆法事

十三日 坂本寿子さま初盆法事

出石町C盆参り

斎藤アヤ子さま初盆法事

十四日 稲葉政雄様三回忌法事

中嶋 勉様初盆法事

十五日 谷原富雄様初盆法事

十八日 よみきかせ

二十日

二十三日 勝林寺寺主・ごども会

二六日 地蔵盆

あすなろ(編集) 検診

みのりを聞く会

二八日 宮嶋盛義氏宅一七回忌法事

互いに忙しいですが、お寺に参り、如来様のお慈悲のなかで話し合いをしようではあります。ついつい偉そうなことを言ってごめんなさい。

わたしは知らず知らずのうちに浄土真宗のわたくしの生まれ育った里の家はは「真言宗」でした。縁あってこの地この家に嫁いできてからはや五〇年になります。「三つ子の魂百まで」と言いますが、今だに真言陀羅尼、ギヤーテー・ギヤーテーをつい口づさみますし、なんのことなしにお大師さまをお慕いしてもらいます。

しかし嫁にきてから五〇年、こちらの浄土真宗の家と村に暮らしているうち、今になつて浄土真宗の有り難さというかスバラシさが少しづつ分かりかけてきたように思います。

</

いろいろなお葬式があります。

葬儀社の仕組んだ豪華絢爛な葬儀。

ひつそりと、極く近親者だけで行う「お別れの集い」。

村の公民館で隣保の助け合い奉仕でつとめる農村型の葬式。等など。

またそれに付随したお通夜や戒名の問題。

宗教僧侶ぬきの葬儀も多くなっています。

葬儀にかかる経費の問題も、保険などの関係もあって深刻です。

しかし、なにはともあれ、最初に考えなければならぬのは、「葬儀の意味」ではないでしょうか。

習慣・習慣だけで判断すべきではないと思います。

先ず浮かぶのは、「亡き人への追善供養」または「鎮魂」。

なにか恨みを抱いて死んだ人、おそらく死にきれず迷っているその魂を慰め鎮めてあげようという趣旨です。お葬式の時の弔辞で「安らかにお眠りください」などというのはこの観念です。鎮魂・慰靈の古代信仰そのままです。葬儀のときのお経もそのためのお祈りか呪文と考えられているようです。戒名も葬儀も、なるべく立派なものを贈ることが死者の供養となるとの考え方です。

「死んでしまってからの孝行なんて」と恐らく死者は歎くでしょう。

それならば、葬儀は誰のためにするのですか。

「虎は死して革をとどめ 人は死して名を残す」

亡き人の遺徳を偲び、偉業を讃える。これも家柄・家名尊重の匂いがします。

すると、亡き人や世間様に対してするセレモニーではなくて、後に残った「わたし」の問題であると言ふことがことの焦点です。人の死という苛酷な現実を前にして、今ここにいるわたしの生と死をいかにするのかを、今こそ深刻に考えなければならないのではないかでしょか。

この機会にこのことを「教えに問う」、とも真剣に話しあう。その機会を得るために通夜も法事もあるのです。この大事な機会をつくるのが僧侶の役目です。

他の華麗な祭壇も戒名も全く必要ではありません。

それはそれとして、一番肝心なのは「あなた」どんな葬儀を望んでいますか。

親鸞さまは、「それがし 閉眼せば 加茂川にいれて うおに与たうべし」

と遺言なさったと言います。

次ぎにはこれを考えてみましょう。



死と往生

「生者必滅会者定離」(じょうじりりあうえしゃじょうり) お釈迦さまの教の出発点は「」からです。死は、だれにでもいつかは必ずやってきます。死はないでいようと考へること自体迷いです。

ただ「死に方」が問題です。

交通事故死、戦死、溺死、遭難死、他殺死、自殺死、憤死、安楽死、病死でも眠るが如き安らかな死もあれば七転八倒狂い死もある。人間の数と同じ数の死に方があるはずです。そのどれを選ぶか。それは全く不可能に近い。それはつまり

「死の縁 無量」。

単純に一つ二つの原因で死ぬのではない。たとえ肺ガンで亡くなつたと言つても、それだけでは人間は死なない。老齢・遺伝子・不養生・不衛生・気候変動・食品管理・運動不足等など、考え及ばぬほどの要因や条件が重なつて結果死に到つたのである。

「よい死に方」を願うのなら、可能な限りこの無量の要因をクリヤーすることに努力しなければならない。

ウオーキング、定期検診、食料管理など日常の努力が必要である。

しかし、そういう努力をした結果、「よい死に方」ができるとは限らない。

そこでどう考えるべきか。どうすべきか。

「なにをしても仕方ない」と全面放棄か。

それとも、「与えられてある今のこの命、このご縁をより大切にいただかせていただきましょう」と、励むことがベタアーハーではないのか。

「死の縁無量」と言うが、たしかに死に到る原因是「一つや二つではない。だが、「死」を支え育んでくれているご縁もまた無量ではないか。老いや死によつて、今まで気づかなかつた尊いご縁、今まで見えなかつた嬉しいご縁もいろいろ見えてくる。

死に行くわたしをとりまく自然環境、草木鳥獸、野に咲く草花でも。また、それにも越えて老い行く私を育んでくれる親族その他のお友達。

そういう無量のご縁のなかで過ごさせていただくれしさを、「一日でも一日でもいただけたならこんなに嬉しい」とはい。

親鸞さまは、あの苦渋に充ちた晩年を京都で過ごしながら、如来のご本願に今よばれ今抱かれている「現生正定聚」(げんじょうじょうじゆ)を歓びなさつたのであった。

もうこのうえは「よからんともあしからんとも」思うことなく「自然法爾」(じねんほうじ)おのづからしからしめられている、老後の一 日一日を丁寧にお過ごしなつた。

そのみ跡を慕わせていただこうと念ずるの頃であります。

勝林寺の過去帳には約一三〇人の戦没者の名前が記されています。もちろん戦争に「招集」された若い軍人兵士が大半を占めています。その他に約三〇名は老人・女性・幼児の記載があります。お聞きでしょうが、「満州

移民開拓団」のうち集団自決した人達です。ソ連戦車だけでなく地元民の略奪をのがれ、

て、すでに男性は現地招集でいなくなつてい

たこの集団は、古里日本めざして悲惨な逃

行。しかし敗戦の年の年、八月七日とも伝え

られているが泥水渾巻く大河に集団で身を沈

めたといふ。叙勲も褒賞もない、しかも故郷にはその遺族・遺産さえない。

もの言わぬこれら戦没者。ことにその遺族もいない戦争犠牲者。(兵士の遺族も最近急

速に亡くなつてゐる)

風化させではない。

世界に「戦争」があつてはならない。

「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」(親鸞ご消息)

お念佛のなかで みんなで 平和を 願い

△王 戦没者追悼

孟蘭盆会法要

毎年 八月八日 勝林寺ではこの法要を勤めて参りました。

戦後まもなくは、すべての寺や教会、どこの自治体、村・部落までも、例えば「慰靈祭」などという名で追悼集会を持ったものでした。

それが例の高度経済成長期に入ると、その好景気の影に、この嘗みも全国的にいつのまにか消されて行つてしましました。

このことが何を意味するのか、深刻に考えてみなければならないのではないでしようか。

死に方」ができるとは限らない。

そこでどう考えるべきか。どうすべきか。

「なにをしても仕方ない」と全面放棄か。

それとも、「与えられてある今のこの命、このご縁をより大切にいただかせていただきましょう」と、励むことがベタアーハーではないのか。

「死の縁無量」というが、たしかに死に到る原因是「一つや二つではない。だが、「死」を支え育んでくれているご縁もまた無量ではないか。

老いや死によつて、今まで気づかなかつた尊いご縁、今まで見えなかつた嬉しいご縁もいろいろ見えてくる。

死に行くわたしをとりまく自然環境、草木

鳥獸、野に咲く草花でも。また、それにも越えて老い行く私を育んでくれる親族その他のお友達。

そういう無量のご縁のなかで過ごさせていたくられしさを、「一日でも一日でもいただけたならこんなに嬉しい」とはい。

親鸞さまは、あの苦渋に充ちた晩年を京都で過ごしながら、如来のご本願に今よばれ今抱かれている「現生正定聚」(げんじょうじょうじゆ)を歓びなさつたのであった。

もうこのうえは「よからんともあしからんとも」思うことなく「自然法爾」(じねんほうじ)おのづからしからしめられている、老後の一 日一日を丁寧にお過ごしなつた。

そのみ跡を慕わせていただこうと念ずるの頃であります。

勝林寺の過去帳には約一三〇人の戦没者の名前が記されています。もちろん戦争に「招

集」された若い軍人兵士が大半を占めています。その他に約三〇名は老人・女性・幼児の記載があります。お聞きでしょうが、「満州

移民開拓団」のうち集団自決した人達です。ソ連戦車だけでなく地元民の略奪をのがれ、

て、すでに男性は現地招集でいなくなつてい

たこの集団は、古里日本めざして悲惨な逃

行。しかし敗戦の年の年、八月七日とも伝え

られているが泥水渾巻く大河に集団で身を沈

めたといふ。叙勲も褒賞もない、しかも故郷にはその遺族・遺産さえない。

もの言わぬこれら戦没者。ことにその遺族もいない戦争犠牲者。(兵士の遺族も最近急

速に亡くなつてゐる)

風化させではない。

世界に「戦争」があつてはならない。

「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」(親鸞ご消息)

お念佛のなかで みんなで 平和を 願い

法要を勤めて参りました。

戦後まもなくは、すべての寺や教会、どこの自治体、村・部落までも、例えば「慰靈祭」などという名で追悼集会を持ったものでした。

それが例の高度経済成長期に入ると、その好景気の影に、この嘗みも全国的にいつのまにか消されて行つてしましました。

このことが何を意味するのか、深刻に考えてみなければならないのではないでしようか。

死に方」ができるとは限らない。

そこでどう考えるべきか。どうすべきか。

「なにをしても仕方ない」と全面放棄か。

それとも、「与えられてある今のこの命、このご縁をより大切にいただかせていただきましょう」と、励むことがベタアーハーではないのか。

「死の縁無量」というが、たしかに死に到る原因是「一つや二つではない。だが、「死」を支え育んでくれているご縁もまた無量ではないか。

老いや死によつて、今まで気づかなかつた尊いご縁、今まで見えなかつた嬉しいご縁もいろいろ見えてくる。

死に行くわたしをとりまく自然環境、草木

鳥獸、野に咲く草花でも。また、それにも越えて老い行く私を育んでくれる親族その他のお友達。

そういう無量のご縁のなかで過ごさせていたくられしさを、「一日でも一日でもいただけたならこんなに嬉しい」とはい。

親鸞さまは、あの苦渋に充ちた晩年を京都で過ごしながら、如来のご本願に今よばれ今抱かれている「現生正定聚」(げんじょうじょうじゆ)を歓びなさつたのであった。

もうこのうえは「よからんともあしからんとも」思うことなく「自然法爾」(じねんほうじ)おのづからしからしめられている、老後の一 日一日を丁寧にお過ごしなつた。

そのみ跡を慕わせていただこうと念ずるの頃であります。

勝林寺の過去帳には約一三〇人の戦没者の名前が記されています。もちろん戦争に「招

集」された若い軍人兵士が大半を占めています。その他に約三〇名は老人・女性・幼児の記載があります。お聞きでしょうが、「満州

移民開拓団」のうち集団自決した人達です。ソ連戦車だけでなく地元民の略奪をのがれ、

て、すでに男性は現地招集でいなくなつてい

たこの集団は、古里日本めざして悲惨な逃

行。しかし敗戦の年の年、八月七日とも伝え

られているが泥水渾巻く大河に集団で身を沈

めたといふ。叙勲も褒賞もない、しかも故郷にはその遺族・遺産さえない。

もの言わぬこれら戦没者。ことにその遺族もいない戦争犠牲者。(兵士の遺族も最近急

速に亡くなつてゐる)

風化させではない。

世界に「戦争」があつてはならない。

「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」(親鸞ご消息)

お念佛のなかで みんなで 平和を 願い

法要を勤めて参りました。

戦後まもなくは、すべての寺や教会、どこの自治体、村・部落までも、例えば「慰靈祭」などという名で追悼集会を持ったものでした。

それが例の高度経済成長期に入ると、その好景気の影に、この嘗みも全国的にいつのまにか消されて行つてしましました。

このことが何を意味するのか、深刻に考えてみなければならないのではないでしようか。

死に方」ができるとは限らない。

そこでどう考えるべきか。どうすべきか。

「なにをしても仕方ない」と全面放棄か。

それとも、「与えられてある今のこの命、このご縁をより大切にいただかせていただきましょう」と、励むことがベタアーハーではないのか。

「死の縁無量」というが、たしかに死に到る原因是「一つや二つではない。だが、「死」を支え育んでくれているご縁もまた無量ではないか。

老いや死によつて、今まで気づかなかつた尊いご縁、今まで見えなかつた嬉しいご縁もいろいろ見えてくる。

死に行くわたしをとりまく自然環境、草木

鳥獸、野に咲く草花でも。また、それにも越えて老い行く私を育んでくれる親族その他のお友達。

そういう無量のご縁のなかで過ごさせていたくられしさを、「一日でも一日でもいただけたならこんなに嬉しい」とはい。

親鸞さまは、あの苦渋に充ちた晩年を京都で過ごしながら、如来のご本願に今よばれ今抱かれている「現生正定聚」(げんじょうじょうじゆ)を歓びなさつたのであった。

もうこのうえは「よからんともあしからんとも」思うことなく「自然法爾」(じねんほうじ)おのづからしからしめられている、老後の一 日一日を丁寧にお過ごしなつた。

そのみ跡を慕わせていただこうと念ずるの頃であります。

勝林寺の過去帳には約一三〇人の戦没者の名前が記されています。もちろん戦争に「招

集」された若い軍人兵士が大半を占めています。その他に約三〇名は老人・女性・幼児の記載があります。お聞きでしょうが、「満州

移民開拓団」のうち集団自決した人達です。ソ連戦車だけでなく地元民の略奪をのがれ、

て、すでに男性は現地招集でいなくなつてい

たこの集団は、古里日本めざして悲惨な逃

行。しかし敗戦の年の年、八月七日とも伝え

られているが泥水渾巻く大河に集団で身を沈

めたといふ。叙勲も褒賞もない、しかも故郷にはその遺族・遺産さえない。

もの言わぬこれら戦没者。ことにその遺族もいない戦争犠牲者。(兵士の遺族も最近急

速に亡くなつてゐる)

風化させではない。

世界に「戦争」があつてはならない。

「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」(親鸞ご消息)

お念佛のなかで みんなで 平和を 願い

法要を勤めて参りました。

戦後まもなくは、すべての寺や教会、どこの自治体、村・部落までも、例えば「慰靈祭」などという名で追悼集会